

さいほうとうしゅう

西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂 尊

第十二回

16章

天馬、蒼穹を翔ける

安政五年（二八五八）

安政五年（一八五八）四月。「日米修好通商条約」の調印問題で世論は二分し、大いに揺れていた。

そんな中、洪庵は思いがけない人物の訪問を受けた。故郷の越前に帰り、福井藩主・松平慶永侯に仕えていた橋本左内である。

久しぶりに左内の顔を見た洪庵の頬が、ほころんだ。

「元気そうだな」

「おかげさまで息災でございます。ただ時折、熱を出したりしますか」

「それは私も同じだよ。お互い、病弱の身は辛いな」

その秋、突然熱発して全身がむくみ、一時は生死の境を彷徨った洪庵の言葉には、実感が籠もっていた。病弱な洪庵の身には時々、

そうしたことが起こった。

左内も、誰より修学に熱心だったが、身体が弱く、そしてよく泣いた。

幼い面影おもかげは残るが、立ち居振る舞いは堂々たるもので、今や大藩の家老並の風格がある。

——たいそう立派になった。

実際、漏れも伝わってくる、退塾後の左内の活躍は、目を見張るものがあった。

左内が越前に帰った半年後に父が没し、長男の左内が医家の家督を相続した。

当時、福井藩では牛痘ぎゅうとうを持ち帰った笠原良策かさはらりょうさくを筆頭に蘭方医が意気盛んで、重役の半井仲庵なからい ちゅうあん、適塾で修学した宮永勤斎みやながきんさいが蘭学こを鼓吹すいしていた。ところが最年少の左内がいつの間にか指導的地位に就き、翌嘉永六年（一八五三）には「大坂除痘館じよとうかん」に負けじと、福井での種痘の普及に努めた。

「そういえば、左内はついに、念願の武家になったそうだな。左内にしてみれば初志貫徹しよしかんてつなんだろうが、聞かせてくれ。どうしてそんなことが可能になったのだ？」

「話せば長いことながら」と前置きをした左内の話は、確かに長かった。

だが聞けば、それは偶然の産物ではなく、必然の積み重ねだったことがわかった。

「まず嘉永七年（一八五四）二月、二十一歳で『蘭医学修学』の名目で江戸に留学し、適塾の先輩の坪井信良つばいしんりょう先生の塾に入門しました。塾頭の薩摩藩・八木称平さつま や ぼく しょうへい殿が、師の信道先生ともども、よくしてくださいました。小生には福井藩の興隆こうりゅうという大目的があり医学の他、軍事や産業の勉強のため、杉田成卿先生すぎたせいけいの門にも入りました。ただし、あくまで知見を広めるためです。小生は学理を極める学究がつきゆうの徒ではなく、学問を実社会に用いる実学家なので、観念的な議論は避け、具体的な経世済民けいせいさいみんの道を目指したのです」

左内は強い意志で武家の地位を勝ち取ったのだ。身分制が堅固な時代には稀有なことだ。

杉田成卿は杉田玄白げんぱくの孫で、当時の江戸の蘭学者の中でも抜きん出ている。幕府の天文方蘭書翻訳係に任じられ「砲術訓蒙ほうじゆつくんもう」を訳している。奔放不羈ほんぼうふきの酒豪でもある。

そのため、初めて顔を合わせた時、人物の底を計るように、超難解な蘭書を渡され、訳してみよ、と言われた。それは成卿自身が読解困難な書だったが、それを見事三日で読み解いたため、成卿は一発で左内に参ってしまった。

だがそんなことは、左内はおくびにも出さない。洪庵は訊ねる。

「左内のことだ、江戸では『今代の三傑』こんだいさんけつとも会ったのであろう？」
左内はうなずいた。

「もちろんです。佐久間象山、横井小楠、藤田東湖の各先生はみな、優れた見識の持ち主でした。でも若輩じやくはいの身で僭越せんえつながら、一番優れていたのは東湖先生だと、小生は思います」

左内は横井小楠とは適塾時代に会っており、見識には感心したが、感じ入ってはいなかった。

佐久間象山には一度だけ会い、西洋事情の明るさに驚かされたという。彼は外国の兵器や兵法を修得し海防策の講究をめざしていたが、身分の上下や服装など些末さまつなことにこだわる傾向が見られ、また自説を枉まげない傲岸不遜ごうがんふそんな性格で敵も多く、左内の好みではなかった。

左内が傾倒けいとうしたのは、激越げきえつな詩人としても有名なカリスマ、水戸藩の藤田東湖だった。

「東湖先生こそ、乱世において日本を教導できる、数少ないお方でございました。安政の大地震でお亡くなりになられたのは、返す返すも無念むねんでございます」

そう言った左内は目を閉じ、一度きりとなった藤田東湖との面談の様子を思い出しているようだ。

大柄な東湖は骨相こつそうも魁偉かいゐで、大きな眼を爛々らんらんと光らせ、朱鞞綿糸しゆぎやめんし

巻きの長剣を傍らにおき、山賊の大親分のようなだった。一方の左内は身の丈は五尺の小柄で、撫で肩で眉目秀麗な優男で、嫺やかな美女とも見紛う端正な顔立ちをしていた。

対照的な二人が相対した場面は、歌舞伎の一場面のように映えた。初めて会う巨軀の志士の頭目に、怖じることなく左内は開口一番、言い放った。

「列強と比して軍備、国力は雲泥の差。かような状況で、どうして外夷を討てましょうか」

その後、西洋列強の現状を諄々と説かれて、衝撃を受けた東湖は、大乘的攘夷論をあつさり捨てて即座に轉換した。

対ロシア政策が重要で、蝦夷地開拓が喫緊の要とした左内に東湖も同意し、均田法、国体論、皇室論でも見解が一致した。東湖は攘夷派だったが、左内との論争の後、あつという間に開国主義者に転じてしまった。

東湖は、外見は剛直な大家ながら、柔軟さを兼ね備えた傑物だった。

東湖は左内を高く評価し、左内も生涯東湖に私淑した。

東湖と出会い、左内は開運したのだった。

「小生が武家になれたのは、東湖先生のおかげです。『越前に人なし』と藩士の鈴木主税殿が嘆いた時、東湖先生は『灯台もと暗し』と笑

い、小生のことに言及してくださったのです。その主税先生が帰藩して、小生をわが殿に推輓すいばんしてくださったのです」

それは異例で藩内でも論議になった。そこで左内を帰藩させ、学業上達を理由に安政二年（一八五五）十月、医員から藩主の住居や外出時の守護御書院番ごしよいんばんに抜擢ばつてきした。

実質的に、藩主のブレーンを務めることになったのだ。

こうして晴れて武家になった左内は十一月末、「学校制度取調」のため再度上府じょうふした。

この時、江戸で越前藩主・松平慶永侯よしなが さつまと薩摩藩主・島津斉彬侯しまづなりあきらの会談が行なわれ、互いの腹心を引き会わせた。

それが左内と西郷隆盛さいごうたかもりの出会いだった。

「福井藩校の『明道館』めいどうかんの立て直しは、相当大変だったようだな」と洪庵は水を向けた。

安政三年（一八五六）、松平慶永が参勤交代で国元に帰ると、横井小楠の献策で設立した「明道館」は全く機能していないことが判明した。立て直しのため左内が呼び戻された。

「当時は若気の至りで、福井など、ほくろみたいに小さく狭い土地で、そこに戻るなんて意味がない、などと不遜ふそんなことを言っておりました。でも藩校を主幹しゅかんした鈴木主税先生に、臨終りんじゆうの席で後事こうじを託された時、洪庵先生の『教育こそ国家の土台である』という言葉を

思い出し、藩校の改革に専念することにしたのです。といっても、適塾の精神をそのまま福井の地に植え替えただけですが」と、左内は涼やかに笑う。

「ほう、それは光栄だな。左内は『適塾の精神』を、どのように理解していたのかな？」

「西洋の学問の真髄しんずいに敬意を払いつつも、西洋にかぶれず、日本古来の儒学精神を土台に据え、長所を取り入れつつ、西洋の技術を取り入れ、実を挙げるといふ現実主義です。小生は適塾の方針を土台にして実学をベースに科学教育ほくじを施し、日本の近代化を目指したいのです」

洪庵はその言葉に感心した。

そのように言われてみれば、確かにその要約は、適塾の精神を適切に表現していた。

こうした融通無碍ゆうつうむげの談論が左内の真骨頂で、だからこそ多くの俊英しゅんが左内に惹きつけられるのだろう。洪庵はそう理解した。

左内は吐息をついて、続けた。

「小生は英明な藩主に過分な処遇をいただきました。しかし福井藩は旧弊きゅうへい著しく、苦勞もあります。物事を変えたがらない守旧派しゅきゆうが主流で、やむなく古参の反対派を『鸚鵡芸おうむげい』と罵りつつ、なんとか『洋書修学所』の開設に持ち込むことができたのです。けれども

そんな守旧派の跋扈ぼっこよりも驚かされたのは、英明君主の慶永侯が、実は攘夷に凝り固まった考えのお方だったことでした。そこで小生は、一介の藩士の身で主君を折伏しゃくふくし、意見を百八十度転換させようとしたのです。幸い時勢を得て以後、慶永侯は無事、開国論者に転向いたしました」

そう話す左内は、いたずらっ子のような表情で笑う。だがそれは、並大抵のことではない。

その逸話いつわは、慶永の闊達かつたつな大度量を示したものでもあった。

しかし、現実ざんげんは惨憺さんたんたるものだった。

左内の急進的な教育改革は守旧派の猛反発あに遭い、彼らとの間の溝は埋めがたく、深いものになった。

安政三年九月末、左内が館長となった「明道館」の開館式が華々しく行なわれ、翌安政四年（一八五七）四月、左内の建議で「洋書修学所」が設立された。その直後、藩主・慶永が参勤交代で江戸へ出府すると、左内は懐ふところ刀がたなとして再び江戸に呼ばれた。

一年少々の福井滞在の間に、左内は先鋭的な教育改革を断行したが結局、彼が福井を離れると、すぐに守旧派が巻き返してしまった。

「明道館」では、左内が立ち去った翌日から反動が起こり「洋学習学所」はたちまち不振となり、講武所こうぶしょでの武芸統合教育も廃止されてしまったのである。

「明道館」の顛末を語る左内の表情に、一抹の翳りがよぎる。

思い直したように話を続けた左内の表情は、次第に輝き始める。

「江戸に出府したわが君は、敬愛する水戸斉昭侯のお子、一橋慶喜殿の將軍擁立を目指しました。薩摩藩主・島津斉彬侯と老中首座・阿部正弘殿が同志でしたが斉彬侯は薩摩に帰藩し、正弘殿は過労がたたり、上府後間もない安政四年六月に病死されてしまいました。万策尽きたわが君は小生に『侍読兼御内用係』を申しつけ、諸事に対応させたのです」

「そんな風に多忙な左内が、古巣の適塾を訪問したのは、懐古の情などということだけではあるまい。何が目的なのかな」

『航海術原書取調のため大坂行き仰せ付け』という藩命を果たすためでございます」

「そうか。だがお前も知っての通り、適塾には航海術の原書はないのだが」

「存じております。これは表向きの口実で、真の命は開国条約の勅許問題、もうひとつは將軍継嗣問題で、そのふたつを同時に処断せよ、との命にて京都に参ったのでございます」

平然と告げる左内を見た洪庵は、絞り出すように言う。

「なんと、そのふたつはどちらも今の幕府にとって、喫緊の重大事ではないか。こう言っては失礼だが、左内のような若輩になんとか

なるものなのか？」

「まさにおっしゃる通りです。小生の如き若輩者せんべいを尖兵せんべいとして奔走ほんそうさせざるを得ないが故に、『越前に人なし』なのでございます。ただし、わが君は英明にして果断かたん、小生は交渉の全権を一任されました。今の小生は、福井藩主の名代なのです」

そう言うと、左内は端然たんぜんと微笑する。

十三代將軍家定いえさだは暗愚あんぐだったため、後見役を決めようとした。この將軍継嗣問題で、幕府の公論は二分され、守旧派の「南紀派」と開明派の「水戸派」が激しく争っている。

ともに一步も退こうとしない状況は、落としどころが見えず、最悪の事態も考えられるような、きな臭いことになっていた。

左内は続けた。

「小生の関心は条約締結問題にあります。しかしわが君にとつての重要度は逆で、小生に一橋慶喜將軍の実現を命じたのです。実は小生は、慶喜殿はあまり評価しておりません。博学ながらも、銜学げんがくの徒とのようにも見受けられます。ためにする議論を好む、空疎くうそなところもあり、人を人とも思わぬ傲岸不遜ごうがんふそんなところも見られます」

「私も継嗣問題より、日米修好条約の締結に関心がある。現状はどんな様子なのかね」

「幕府は下手を打ちました。筆頭老中・堀田正睦侯は対外的な対応ほつたまさよし

に關し、『幕末の三秀才』の勘定奉行兼海防係・川路聖謨殿、目付兼海防係・岩瀬忠震殿、外国奉行に水野忠徳殿を当てるといふ、これ以上ない布陣を敷きました。ところが攘夷論者が台頭して苦境に陥り、お三方は、条約締結の批判の矛先を逸らすために上洛し、朝廷の勅許を取ろうとしました。本来であれば、政事は幕府の所管として強行すればよかつただけのこと。これも幕府が弱体化している証しです。そこで小生は、主命の將軍継嗣問題の任に、自分の本来の目的である条約締結問題を絡めて、両方とも思うままにしようと考えたのです」

「なんと大胆な」と洪庵は、左内の神算鬼謀に賛嘆して、呟く。洪庵の脳裏には、彼の天敵・佐藤泰然の顔が浮かんだ。朝廷の許しを得るといふ、慣例に囚われない実利主義的な解決策は、いかにも泰然が差配しそうなことだった。

「小生は慶永侯に建言し、この機に乗じて將軍継嗣問題を動かすため、小生を京都に派遣していただくよう、お願いしました」

それは「京都手入れ」と呼ばれる政治工作だったが、幕府は大名に対し、そうした朝廷との直接の交渉を禁じていたのだ。

その禁を犯して朝廷にいる公家と連絡を取り、入説することはさう呼ばれていたのである。

「わが君から『朝幕の間隙を弥縫し、継嗣の持論を遂げよ』と命を

受けた小生は、『継嗣の持論』の部分に『条約締結の持論』を重ね読みしたのです」

「主客転倒、というわけか」

「本末転倒、とも申します」と左内は笑う。そして続けた。

「幕府執行部は、堀田正睦侯、川路聖謨殿、岩瀬忠震殿の三人で上洛し、勅許を取ろうと画策したのです。実は彼らは『南紀派』でした」

「ほう、開明派が、守旧派の主君を選ぶのか」と洪庵は、意外そうな口調で言った。

「意外でしたが、彼らの本心は条約問題が主、継嗣問題は従なのだと、小生は見抜きました。城内の不満分子を懐柔する手段として『南紀派』の皮を被ったのです」

「なるほどな」と洪庵はうなずく。左内は続けた。

「そこで小生は京に発つ前、江戸で川路聖謨殿とお会いし、条約締結の勅許を朝廷から得るためには一橋侯推戴を朝廷に申し出て、恭順を唱えるのが一番の早道だと説きました。いつぞや、井伊殿との諍いの時に面識があったのが思わぬ役に立ちました」

「そんな説得が可能なのか？」と思わず洪庵は問い返す。それは当然の問いだった。

なにしろ一橋侯の父の水戸侯は誰もが知る、攘夷派の首魁なのだ。

「水戸の烈侯れつこうの攘夷は世間がそう見ているだけで、水戸侯は徳川の隆盛を望んでおられるだけ、と東湖殿から伺っておりました。一橋侯を立てれば朝廷からは攘夷遂行の幕府の決意に見え、開国条約締結は一時凌しのぎに見えます。川路殿には、一橋侯は利に聡さといお方なので、就任後は容易く意見を変え、水戸の烈侯はわが子可愛さで追隨ついでするだろう、と示唆しきしたのです。これで幕府の中ちゆう枢はわが水戸派の手中に落ちたのです」

「なんと鮮やかな」

そう言った、洪庵は次の言葉が続かない。だがそこで左内の表情は曇った。

「幕府には論理が通用したので楽でしたが、朝廷は簡単には行きませんでした。今の朝廷には有象無象の儒子じゆしが取り憑き、口々に好き勝手なことを言っております。そこで小生はまず、取り巻きの攘夷論者を撃破することから始めました」

「左内は開国主義者だろう。それは子羊が狼の巢に飛び込むようなものではないか」

「彼らは『利』ではなく『理』に生きる者。論破された狼は、おとなしい子羊になりました」

左内はにやりと笑う。左内は、幕吏ぼくりから「王室書生」や「浪人間屋」と呼ばれた、梁川星巖の私邸「鴨沂小隠おうきしょういん」に巣くう一派の論客、

頼三樹三郎を一撃で撃破してしまったのだという。

「連中は外国の知識に乏しいので、外国の現状を伝えました。これは事実なので認めるしかありません。それでもなおも『攘夷の聖戦を』と戯言を言うので、『今、外夷と戦えば負ける』と小生は言いました。すると『神国は決して負けぬ、神国には神風が吹く』となど思う壺のことを言う。』万が一負けた場合はどうする』と聞きますと、『その時は潔く花と散ろうぞ』と答える。そこで『亡国は、畏れ多くも天朝をも滅するということであるぞ』と大喝したところ、儒子連中は非を認め『開国に積極的に賛成はしないまでも、むやみに反対するのはやめる』との言質を首領の梁川星巖殿からいただき、連中は子羊のようにおとなしくなりました。ついでに一橋侯支持も取り付け、公卿も紹介していただいた次第です」

左内は二カ月余りで公卿の最高位で摂政、関白を輩出する近衛、鷹司、九条、二条、一条の五摂家を説得、公論をまとめ上げてしまった。

中でも尊王攘夷派の最高位で狂宮と呼ばれ、獅子吼して幕吏を懼伏させる天皇の最高顧問、青蓮院宮をいかに折伏したかは、手に汗握る講談のようだった。

「最終的に無事、青蓮院宮を始め宮家に一橋侯擁立を認めていただきました。なので行きがけの駄賃で、川路聖謨殿と青蓮院宮の会谈

も設定しました。ところが肝心の幕府の目論見は失敗してしまいました。筆頭老中の堀田殿は訥弁で交渉事がお下手、公家から拙人と馬鹿にされ、舐められてしまったのです」

失敗に終わった本当の理由は、朝廷内の統制が取れていなかったせいだった。

当時、朝廷で力を持つ双璧は、関白・九条尚忠と太閤・鷹司政通のふたりだった。

日米修好条約の調印勅許の件では当初、関白・尚忠は反対し、太閤・政通は賛成した。

孝明天皇を始めとして、大部分の公家は勅許に反対した。このため幕府臆見に見られた太閤は、幕府から賄賂を取っているとの風評まで立ってしまった。

二月末に一旦、どちらとも言えない曖昧な回答を出すと三月、驚いたことに関白・尚忠が賛成し、太閤・政通が反対に回り、百八百度ひっくり返ってしまったという。

「そんなことになったのは、朝廷工作の賜物です。関白・尚忠殿は溜まり場老中筆頭の井伊直弼侯の腹心・長野主膳殿に説得され賛成し、太閤・政通殿は諸大夫に諫言され、反対に転じたのです」

洪庵の脳裏に、かつて適塾の前で遭遇した彦根藩主の主従の様子が浮かんだ。

——左内とは、いかにも合口あいくちが悪そうな主従だったが……。

そんな洪庵の思いは、口には出せない。左内は滔々とうとうと続ける。

「長野主膳殿が巨額の賄賂を九条家の諸大夫、島田左近殿まごんに渡したところ、関白・尚忠殿は三月十日に『条約の件は一切幕府に任せる』という案文を朝議で可決なさいました」

「よかったではないか。毒も用いようによつては薬になる、というわけか」

「その通りです。条約締結問題については奇しくも長野主膳殿と小生は同意見でした。手段は感心できませんが、敵ながら天晴あつぱれ、と賛嘆いたしました。けれどもその直後、権中納言中山忠能殿ただなすはじめ八十八名の公家が連署した『廷臣八十八卿の列参』で『勅許を改作せよ』との意見書が提出されてしまったため、腰の定まらない関白・尚中殿はその圧力に押され、勅答の改作を約束してしまったのです。そのため三月二十日の二回目の勅は当たり障りさわのない『今度の条約の趣旨では国威こくゐも立ち難いから、三家以下諸大名に協議ぎぎさせ言上するごんじょうように』という、毒にも薬にもならないものとなってしまいました」

そう言つて、左内は唇くちびるを噛んだ。「再検討を要す」という内容は、回答期限が迫る幕府にとっては拒否も同然だった。だが左内は、気を取り直して続けた。

「そこで小生は先週、堀田殿が宿泊する本能寺を訪ね、一橋侯継嗣

を条約勅許の交換条件にしたらどうかと提案しました。小生が『京都手入れ』で朝廷の実力者の意見をまとめ上げたのを利用すればいいのです。堀田殿はその提案に乘りましたが、時すでに遅し、朝廷の決定をひっくり返すことはできず、三月二六日には本願寺の堀田殿の元に『条約勅許は認めず』というお言葉が正式に伝えられました。以上が幕府の『京都手入れ』が失敗した顛末です」

左内はうつむいて、大きく吐息をついた。

それから顔を上げて、言う。

「しかし、収穫しゆつかくもありました。その三日後、小生は岩瀬忠震殿の宿舎すいがんじの瑞巖寺を訪ね諸事語り合い、意気投合いたしました。岩瀬殿がいらつしやれば、最悪の事態は避けられそうです」

「だが長野主膳殿あんなやくが暗躍しているのなら、盤石ばんじやくだという將軍継嗣問題も危うくならないか？」

「その恐れはあるので、最後の詰めに鷹司家の侍講じこうの三國大学殿みくにだいがくという者に太閤・政通殿の懐柔を依頼しておきました。ここまでしておけば、まず大丈夫だと思います」

話を聞くにつけ、洪庵の胸中に、かつて左内に対し感じていた危うさが蘇よみがえる。

おそらく今の論客で、左内に匹敵する者は指折り数えるほどしかないだろう。

しかし、その論が正しく一分の隙もないが故に、凡人の反感を掻き立ててしまう。左内がことを成そうとした時、そうした凡百ほんびやくの有象無象の抵抗が、最大の敵になるのではないか。

だがそんなことを言ったところで、もはや左内は洪庵の忠告には耳を傾けないだろう。

天馬は蒼穹そうきゆうに舞い上った。

あとは彼が天駆けるのを見守るのが、師たる自分の務めなのだろう。

「それは大変だったね。だがそんな大事の最中、どうしてわざわざ適塾を訪れてきたのかな」

洪庵が、柔和な表情で訊ねると、左内は目を閉じて大きく息をした。

そして目を見開くと、真っ直ぐに洪庵を見た。

「洪庵先生に伺っておきたかったことがあるのです。先生の目には今の小生は、いかに映っておるのでしょうか」

洪庵は息を呑む。

これまで一切迷いのなかった左内が、そんな質問をしてくるとは夢にも思わなかった。

私の答えは、左内なら聞かずともわかっているはず……。

——ならばなぜ今、そんなことを尋ねるのだろう。

次の瞬間、洪庵は自分では思ってもいなかった言葉を口にしていった。

「私心なく天下のため身を捧げて粉身碎骨し、東奔西走している左内は適塾の誇りだ。一時でもお前を教えることができたことを、私は誇りに思う。私には『大医』というものがわからなかった。でも今のお前を見ているとよくわかる。お前は迷わず、王道を歩むがよい」

しばらく、左内はみじろぎひとつしなかった。

ふと見ると左内の頬を、滂沱の涙が流れ落ちている。

左内は拳で涙をぬぐい、顔を上げた。

「ありがとうございます。洪庵先生にそう言ってもらい、安堵いたしました。正直申し上げますと、小生がやっていることは空回りすぎず、所詮は時代の徒花ではないか、と空しく思うこともございました。けれども先生のお言葉で、胸のつかえが下りました。明日からまた一意専心、わが君の意志を実現するために邁進して参ります」

そう言いながら、次第に左内は前のめりになり、ついには畳に突っ伏してしまった。

「無様なさまを、お見せし申し訳なく……ただわたくしも、さすがに少々くたびれまして……許されるなら、ここでしばらく休ませて

いただきたく……」

最後の言葉の語尾は、よく聞き取れなかった。

命が尽きるように眠り込んだ愛弟子を見つめた洪庵は立ち上がる。

着ていた羽織を脱ぎ、その身体に掛けると、行灯あんどんの灯ともを吹き消し、部屋を出て行った。

翌朝。

洪庵が書斎に行くと左内の姿はなく、畳まれた羽織の上に一文が添えられていた。

——生キテハ名臣トナリ 死シテハ列星ト為ラン

洪庵の視線は、その雄渾ゆうこんな筆に注がれたまま、動かなかった。

その後しばらくして洪庵は、とんでもないウワサを耳にした。

盤石と思われた一橋慶喜擁立きょうりゅうが、梟雄・長野主膳の寝技でひっくり返されたという。

井伊直弼の懐刀と左内の争いは、朝廷工作では、左内に軍配が上がつっていた。

朝廷の人間関係を把握し、青蓮院宮、太閤鷹司政通、左大臣近衛忠熙ただひろなど大勢が慶喜擁立に賛成したからだ。

三月二二日の議奏ぎそうの文言では「嗣子ししは『年長、英明、人望』の三条件を満たす人物たるべし」との文言を勅諭ちよくじよんに入れることに成功

した。それは一橋家継嗣の聖断に等しかった。

そこで左内は成功を確信し、洪庵の元を訪れたわけだ。ところが長野主膳の手中に落ちていた関白・尚忠が肝心要の三要件を省き、勅諭を骨抜きにしてしまった。

二日後の勅諭は一転して、一橋、南紀のどちらにも取れる文言になってしまった。長野主膳は、賄賂と脅迫で関白・尚忠を籠絡し、南紀派に鞍替えさせ勅諭を改竄させたのだ。

一方、左内は太閤・政通に取り入るため三國大学なる小人物の強請に屈し、禍根を残した。

左内の完敗だった。そこに更にとんでもない事態が出来る。

四月二十日、朝廷説得に失敗した老中首座・堀田正睦が失意のうちに江戸に帰着すると、わずか三日後の二三日、彦根藩主井伊掃部頭直弼が大老に就任する。

直弼の大老就任は、開国派の一瞬の隙をついた、「南紀派」の暗躍の大成果だった。

その動きの中心にいたのは紀伊新宮城主・水野忠央を始めとする溜場詰の多くの大名で、彼らは一蓮托生で結託していた。これにより以後「一橋派」は劣勢になり、左内の主君・越前公松平慶永も窮地に陥り、左内の運命は暗転していく。

思えば四月、左内が洪庵を訪ねたこの時は、彼の人生が最も光り

輝いていた瞬間だった。

井伊直弼の大老就任に「一橋派」と、開国交渉に対応した幕府官僚たちは一斉に反発した。

だが井伊家は過去にも大老を輩出した家柄であるため、その点では問題はない。

だがひとつだけ、それまでの大老とは大きな違いがあった。

以前と違い、直弼は就任直後から強権を発動し恐怖政治を始めたのである。

徳川譜代筆頭ふだいの名家・井伊直中なおなかの十四男で養子縁組もできず、十七歳で三百俵びょうの捨て扶持ぶちを与えられ、「埋木舎うもれぎのや」と自嘲じちやうした北屋敷の部屋住みで終わる運命だった不遇の男。

その彼が、父と兄の相次ぐ夭折ようせつで彦根藩三五万石たいしゆの太守わすとなつて僅か八年。

ついに幕閣のトップに躍り出た直弼は、苛烈かれつで果敢かかんな性格を隠そうともせず、恐怖政治を断行し「赤鬼」と恐れられるようになる。だがそれはしばらく先の話である。

江戸城内は不穏な空気で揺れ動いていたものの、堀田正睦の治世の流れが今しばらく続いた。

そんな中で、洪庵には慶事が立て続けに起こった。

四月、洪庵の大願のひとつが成就したのが、慶事の始まりである。大坂除痘館じょとうかんが設立八年目にしてようやく幕府の認可を得て、公的な施設になったのである。

二度の審問後の四月二四日に官許かんきよが下りた時、洪庵は誇らしげに日記に綴つづった。

——遂に公然たる天下の種痘所しゅとうじよと相成あいなり侯儀そうろう、愉快至極なり。

久しぶりに弟子たちと食事を共にした洪庵は、上機嫌に言う。

「ようやく積年の願いが叶ったよ。毎年『奉り口上書』を出しては拒否され続けてきたからね。もう無理かと思っていたら昨年突然、

大坂東町奉行になられた戸田氏栄殿うじよしに、改めて願書を出すようにと指示された時は夢かと思った。戸田さまの前職うらがが浦賀奉行で、日米和親条約の締結にも関わったお方だから視野が広がったのだろう」

「それと、老中首座だった堀田正睦のお力も大きいでしょうね」

「その通りだよ。確かに目出度い話だが、除痘館立ち上げ時からの同志、日野葛民先生かつみんと喜びを分かち合えなかったことは心残りだよ。除痘館の当初の仲間が残っているのは、大和屋さんやまとやを含めて四名しかいないからね。時の流れは容赦ようしやがなく残酷なものだな」

洪庵は目を閉じ、しみじみと呟く。

「でも我等が先生方のご意志を継ぎますのでどうか、ご心配なさらずに。これは洪庵先生の、後世に誇れる偉業です」

「いや、除痘館の官許に関しては、私の力など微々たるものだよ」

それは決して謙遜けんそんではなく、偽いつわらざる本心だった。

大坂東町奉行の戸田と筆頭老中の堀田という二人の行政トップが決断してくれたおかげで官許を果たしたが、それにはあのお方の後押しがあつたに違いない、と洪庵は確信していた。

浪速なにわを訪れた時に泰然が、堀田正睦侯は洪庵と同じ年だから、あれこれ教示してやっているんだ、と言っていたのを思い出す。

最近の堀田老中のおおらかでの確な政策からは、泰然の匂いを感じた。

開明派の堀田正睦が、老中首座として江戸城の舵取りを任されたのは「先読み泰然」がいてこそだろう。だからといって直接礼を言う気にならないのが、合口の悪さなのだろう。

そこにもうひとつ、朗報が重なった。安政五年一月、江戸で大槻おおつき俊斎しゅんさい、伊東玄朴げんぼく、戸塚静海とつかせいかいなどの蘭医が種痘所の開設を願ひ出て、許可が下りたのだ。五月にお玉ヶ池に発足した種痘所は、十一月に火災に遭つたため、下谷したやいずみ和泉橋通りに新築移転した。

それは玄朴の学塾兼屋敷である「象先堂しょうせんどう」の近くだった。將軍家定の脚気かっけ対応で評価された玄朴は、蘭医初の奥医師に任じられた。

非凡な行政官の玄朴は、その機を捉えて戸塚静海とつかせいかい、竹内玄同たけのうちのげんどうという二名の盟友ほうげんも法眼ほうげんに任命させるという離れ業を決めた。

それまで奥医師職を独占していた漢方医には、もはや対抗する術はなかった。

次に玄朴は私立種痘所創設の音頭おんどを取った。それは大坂の除痘館もほうを模倣したものだ。玄朴は洪庵の先例には言及しなかった。天領とはいえ所詮は一地方都市の私的な試みと、日本の行政を司る江戸での創設とは次元が違う、と肚はらの底で思っていた。

要は、自分が日本の蘭学界の最高峰だ、と天下に示したかったのだ。

事実、蘭学こうりゆうの興隆において玄朴が果たした役割は大きい。安政四年に、幕府が蝦夷地へ種痘医を派遣した大事業も、玄朴なくしては成立しなかっただろう。この時玄朴は、蝦夷地種痘の責任者に先年、種痘普及のための錦絵を洪庵に贈った桑田立斉くわだりゆうさいを任命している。種痘術の伝道は、西方では長崎つうじの通詞たちと洪庵が仕切っていた。ならば東方は自分がやる、という気概もあったに違いない。

玄朴の思惑を考えて、黙り込んでしまった洪庵に、弟子が言う。
『扶氏經驗遺訓』の刊行も快挙でした。巻末の『扶氏医戒之略』ふしけいのりやくは何度読んでも感動します』

それがこの年の慶事の二つ目だった。洪庵はうなづく。

「亡き師・坪井信道つぼいしんどうから委託され、翻訳は終えていたが、蘭医書刊行に制約が掛かったせいで出版できなかった。そこに黒船騒ぎで状

況が一変し突如^{とつじよ}刊行することができた。やっと肩の荷が下りたよ。江戸で仔細に対応してくれた箕作^{みつくりしゆうへい}秋坪のおかげでもある」

二月に初篇の許可が下り、五月に版下を作り終えていた。

だがそこから難渋^{なんじゆう}した。

読物本は作者から原稿を買い取った本屋が対応するものだが、医学書のような専門書は出版許可から印刷、製本まで全て著者が実施する。許可を得るための伺い本の作成、版下を書かせ校閲^{こうえつ}、木版の彫師に摺師^{すりし}、製本まで全て著者の手配である。

その手間は膨大だ。そこを箕作秋坪が対応してくれたのだ。

序文が滞^{とんじお}ったのは秋坪の養父、箕作阮甫^{げんぽ}が米国使節ハリスが出す外交文書の翻訳、蕃書調所^{ばんしよじゆせしよ}での授業、江戸入りしたハリスの宿舎にするため「蕃書調所」の引越しなどが重なった上、玄朴と江戸の種痘所設立のため会合を重ねるなど、雑事で超多忙だったためだ。

それでもその合間に書き上げてくれた序文は、名文家だけあって素晴らしい出来だった。

逆三角形の顔立ちをした箕作阮甫が、多忙な業務をこなしながら、さらさらと書き上げる様子が脳裏に浮かび、洪庵は胸中で両手を合わせた。

それはギリギリの進行で、洪庵はハラハラし通しだった。

実際、泰然^{ゆづりよ}の憂慮は現実となり、大老・井伊直弼の専横政治が幕

を開けた。

四月二四日、井伊直弼が大老に任じられると内情は一変し、六月には堀田正睦と松平忠固が老中を罷免ひめんされる。後任は仕事を命令通り実直にやるタイプの藩主を老中にした。

五月一日、井伊直弼は徳川慶福の將軍就位を内奏ないそうする。

これは違勅いちよくだったが、朝廷は徳川家内部のことは大目にみよう、という姿勢で対応した。

そんな中、幾度も調印延期に業を煮やした米大使ハリスが江戸沖に軍艦を乗り入れ圧力をかけてきた。このため六月十九日、大老、老中、若年寄わかじより、三奉行、海防掛の合議を開いた幕閣は「事勿れ開国主義」の本領發揮で、翌六月二十日、勅許を得ずに日米修好仮条約を締結してしまう。しかも調印翌日の二十一日、五老中連名の紙片で報告を済ませたため朝廷は激怒した。

条約締結の中心の岩瀬忠震は「勅許を得ずに条約を締結したのはやむをえなかったが、大老・老中の誰かが上京し朝廷に事情を申し上げ、ご諒恕を請い奉るべきである」と主張していた。

しかし、井伊大老は岩瀬の諫言をあつさり無視した。

朝廷も、彼我の実力差を感じていたため、開国の決定に関しては幕府を咎められなかった。

なので違勅の方向で責めたわけだ。この後の幕府の執行部の振る

舞いも酷かった。

六月二十二日、条約を諸侯に提示すると翌二十三日、激怒した慶喜が井伊直弼と直談判に乗り込む。ところが慶喜は腰砕けになり条約締結の違勅を寛恕かんじよした上、慶福の將軍就任まで容認してしまう。

二十四日には松平慶永が島津斉彬、水戸斉昭らと共に登城、井伊直弼を責めた。

有名な水戸斉昭の「不時登城」である。

だが翌二十五日、大老・井伊直弼は一方的に慶福の將軍就任を發表し、朝廷そうてんに奏聞してしまい、將軍継嗣問題はあつけなく決着がついた。

それから直弼は懸案の水戸退治を始める。七月五日、「不時登城」により水戸斉昭に急度つっし慎みおわり、尾張慶勝と越前慶永には隠居かつ急度慎みを命じ、「三卿の隠居慎み」となる。

三十一歳の松平慶永は隠居して春嶽しゆんがくと号した。

七月六日には水戸藩主慶篤よしあつを登城差し止めに、一橋慶喜を登城禁止に処した。

それは將軍・家定いえさだの名で下された処分だった。

家定は七月二日から重体になり、四日には死亡していたといわれる。けれども家定の死去は八月八日まで伏せられた。

井伊直弼が三卿の処分を急いだのは、七月四日に「三家か大老の

うち一人を上京させよ」という勅命が下ったためだ。直弼にとって一世二代の大博打、間一髪の綱渡りだった。

そうした内情のすべてを知る将軍侍医・伊東玄朴は、井伊大老の弱みを握り、蘭医の伸張に大いに励んだ。

井伊直弼は筋金入りの権威主義者だった。

そもそも老中首座・阿部正弘あべまさひろや堀田正睦が、幕府の慣例を破り諸侯に意見を聞いたり、朝廷に奏聞すること自体が、気に入らなかつた。

朝廷は東照公以来、幕府に政務を一任された。これを幕府の要職者が自ら破ったため、水戸や越前がよけいなことを言い出し、外様まで横議するに至ってしまった。

それは弱腰だった阿部正弘や堀田正睦のせいである、と井伊直弼は考えたのだ。

井伊直弼は、合議による妥協政治を廃し、独裁的な高压政治へと、一気に方向転換した。

後継将軍を決定し、目障りな三卿を排除した大老は、盤石の権力基盤を確保した。

八月、そんな井伊大老を、激怒させる大事件が起こった。所謂「水戸勅諭事件」である。

それは、朝廷に不敬をした井伊大老を、名指しで非難するものだ

った。

「君側の奸、井伊を排除し三卿に政を司るように」という朝廷の指令が直接、水戸藩に下され、水戸藩の意気は上がった。

井伊大老の水戸憎しの感情は、もはや引き返すことができないものとなっていく。

以後、井伊大老の強権政治は激しさを増し、「安政の大獄」へなだれ込んで行った。

だが一方、一度出来た蘭学へ傾倒する流れは、容易には変わらない。

七月、幕府は奥医師にオランダ医学の兼修を許した。それは老中首座・堀田正睦の置き土産だった。こうなればもう、洪庵の「扶氏経験遺訓」出版が中止になる心配はない。

だがもし今、新たに願い出たら、果たしてうまくいったかどうか……。

そんなことを考えてぼんやりしていると、塾生が洪庵を励ますように言う。

「適塾の評判は天下に鳴り響いております。今や日の本一の蘭学塾と名高く、我々塾生も鼻が高いです。それは洪庵先生のご指導の賜物です。先生こそ一番の蘭学者です」

洪庵は、微笑を浮かべて、首を横に振る。

「いや、私が一番の蘭学者などとは、おこがましい。東に『象先堂』の伊東玄朴先生や『順天堂』の佐藤泰然先生、『鳩居堂』の村田蔵六がおられるからね。だが、わが『適塾』が日の本一の蘭学塾だといふのは正しい。塾頭の福沢諭吉の下、長与専齋や高松凌雲、大鳥圭介など多士濟々の塾生たちが、たゆまず切磋琢磨しているからだ」そこに泰然がいたら「そんなだから章は、はりぼて連中に舐められちまうんだぞ」などと言われてしまいそうだな、と洪庵はこっそり苦笑する。

するとそれまで黙っていた塾生のひとりが重い口を開いた。

「雨露をしのげ、空腹にならずに勉学に励める場所、それは我々塾生には桃源郷のような場所です。その学堂を作ってくださった緒方先生はやはり、我々にとって日の本一の蘭学者です」

その言葉は洪庵の全身を、喜びで満たした。

私がやってきたことは間違いではなかった、と洪庵は、自分に言い聞かせた。

こんな風に安政五年の前半は、慶事の中で穏やかに過ぎていった。蘭学では日本一との呼び声も高い適塾だったが、教科書として使える蘭語の本は、医学と物理学の本を合わせて十冊にも満たなかったという。

その点では、江戸で伊東玄朴が主宰している「象先堂」に遠く及

ばなかった。

このため適塾生の中には、佐野栄寿えいじゆ つねたみ（常民）や武田斐三郎あやまぶろうのように、兵学の蘭書を求めて、「象先堂」に移った者も少なからずいた。それでも適塾の評判が高かったのは、塾生の修学くんとうの熱意が他の塾を圧していたからであり、それはまさしく洪庵の薫陶の賜物だった。だがその年、安政五年の後半に、ふたつの災厄の暴風雨が襲いかかってきた。

ひとつは天与の災厄「コレラの流行」、もうひとつは悪意の人災「安政の大獄」である。

安政という時代はいよいよ白熱し、灼熱の終わりを迎えようとしている。

(つづく)